
ロリコン、脇差し、ヘッドホン

二三川廉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリコン、脇差し、ヘッドホン

【Nコード】

N2150M

【作者名】

二三川廉

【あらすじ】

とある刀鍛冶と、その弟子の話

（前書き）

三大話です。テーマはタイトルの通り。中二臭さは抜け切れてません。展開の強引さはご愛嬌。ちよつと修正しました。

廃村。そう称するに相応しい荒れ果てた土地に、一人の男が立っていた。

黒い直垂ひたたれに膝まで裾のある、赤と緑の市松模様の肩衣。この廃村にはおよそ不似合いな格好の男は、乾き切った死体と廃屋で形成された空間に、確かに存在していた。

「……………」

纏めずに自由に揺れていた、腰まである黒の長髪が揺れる。砂埃がその髪に絡み付いても、男は気にせず歩き続けた。鷹のように鋭い両目を左右に揺らしながら。

「あ……………」

男の耳に入ったのは、幼い少女の声。か細く消え入りそうな声だったが、男は確かにその声を聞き取った。

「う……………」

男が左を向くと、少女がいた。廃屋の隙間に隠れるように。小さな体を震わせながら、少女は縮こまって座っていた。

「ガキ……………」

男は低い声で呟き、少女にゆっくりと歩み寄った。

「盗賊にやられたのか？」

男の問いに少女はただ震える。か弱く、儚く、震え続けていた。

「そうか」

その反応に特に何かを思った様子も無く、男は肩衣の懷に右手を入れた。

「このままだと、お前は確実に飢えて死ぬな」

冷酷な現実が、まだ幼い少女に容赦無く叩き付けられた。少女が怯えるように男を見ると同時に、男は右手を肩衣から抜いた。

「どうせなら、今ここで苦しまずに殺してやろうか？」

その右手に握られていたのは、一振りの脇差し。暗く、鈍く、銀

色に光る刃に少女の姿が映っていた。

「っ！！」

瞬間、少女が砂埃の舞う地面から何かを拾い上げる。

「死な、ないっ」

小さな両手に握られたのは、鉄製の錆びた鍬。ゆっくりとそれを構えながら立ち上がる少女の目には、先程までとは違う色が宿っていた。

「……やる気か？」

男の言葉を見無視して少女が駆け出す。そして、か弱い力で鍬を振り下ろした。

「っ！！」

脇差しが鍬を受け止める。が、それでも少女は鍬を放さない。それどころか、男に対抗するように力をさらに込め始めた。

「生きる気か？ この状況で」

「ん……！！」

脇差しにさらに重さが加わる。男は意外そうに目を見開くも、脇差しで鍬を防いだまま、ゆっくりと口角を吊り上げた。

「よっと」

男が体を横に逸らし、鍬を受け流す。力を受け止める物が無くなった少女は、そのままよろけて渴いた地面に倒れ込んだ。

「うわっ！！」

少女が慌てて立ち上がり、顔の埃を拭う。そして

「名前は？」

男は少女に聞いた。

「……？」

警戒を解かずに男を睨み付ける少女。男はそんな少女に軽く笑い掛け、楽しげに言った。

「殺さねえから安心しな。それよりも名前を教えろ」

少女は少し警戒を解いたようで、手に込めていた力を抜いて、ゆっくりと口を開いた。

「……ゆめ……」

「ゆめか。随分と弱そうな名前だな」

むっとして額に皺を寄せる少女を尻目に、男が何かを思い付いたように指を弾いた。

「よし。今日からお前は巴^{ともえ}と名乗れ」

「……え？」

きよんとする少女

巴の頭に、男が優しく右手を乗せた。

「俺は鍛冶鉄^{かじてつのすけ}之助。江戸って所に行つて刀鍛冶をやるうと思つている」

巴の頭をわしわしと撫で、懷から取り出した脇差しを差し出す。

巴は未だ事態が掴めていないようだった。

「俺に着いて来るならくれてやるよ」

「…………」

鉄之助の言葉を少し理解した様子の巴は、しばし脇差しを見詰め、鋤を地面に投げ捨て、力強く頷いた。

「そうか。そりゃ良かった。ちょうど弟子が欲しかったんでな」

脇差しを巴に渡し、鉄之助は歩き始めた。それに遅れて、巴も慌てて着いて行く。

「お前、歳は？」

「……六歳」

「そうか。ならすぐに仕事が覚えられるな」

鉄之助は期待するように笑う。少女もまた釣られるように、笑った。

そして、時は流れ

「師匠！！ 師匠！！ んぎゃー！！」

耳をつんざくような少女の金切り声が迫り、ほぼ同時に、金属片

が崩れ落ちる音と悲鳴が鳴り響く。そして、すぐに辺りは静寂に包まれていた。

「……ちっ」

再び少女が自分と呼ぶ声を聞き、暗く狭い部屋で座禅を組んでいた男が扉を開く。

「あ、師匠！」

男の姿を見て、少女が床に転げ落ちた金鎚や巾着袋を、慌てて服の中にしまった。

男の腰程度の身長だが、大差の無い長い髪の少女を、男はじとりとした視線で睨んだ。男の赤と緑の市松模様の肩衣という、派手な格好とは対称的に、少女は土色のボロきれ以外何も身に纏っていない。身に付けていると言うならば腰に差した脇差し、そして首にかけている、土で薄汚れた藍色のヘッドホンも加えられるが。

「てめえ……何を慌ててやがる」

「すいません！でも聞いて下さい師匠！」

座禅を邪魔された男は不機嫌そうに文句を言うが、少女は一切気にせず、軽く頭を下げてから笑顔で告げた。

「私の刀が褒められたんです！」

「あたりめえだ。誰がてめえを鍛えたと思ってやがる」

男は額に皺を寄せたまま、冷たく言い放った。しかし、少女はその言葉をそのまま受け取ったようで、ピンと背筋を伸ばして、大声で答えた。

「首塚鉄之助師匠！！この私、巴を育てて下さった、江戸一番の刀鍛冶です！！」

あまりに純粋な巴の言葉。鉄之助の額の皺が、少しでも伸びたように見えた。

「そうだ。俺に六年も鍛えられた、そんなお前の刀が売れねえわけがねえんだよ」

「はい！ありがとうございました！」

巴は嬉々としてお辞儀をし、そして思い出したように頭を上げた。

「そういえば師匠、私も今年で十二になります」

「ん？ ああ、そうだな。……それがどうかしたか？」

「はい！」

突然、巴が両手を大きく広げた。

「抱いて下さい！！」

「……………」

鉄之助の表情が凍り付いた。

「さあ！ 師匠！」

「ちよつと待て。一度黙れ」

両手で頭を抱え、困ったように首を振る。座禅の事などは、既に頭の中から消えていた。

「お前……一体どのどいつに入れ知恵されやがった」

「秘密にすると約束しちゃいました！」

両手を口に当てる巴。真つ直ぐな性格をした彼女のことだ。口を割ることはまず有り得ない。

「……とりあえず一つ覚えておけ。そういう言葉を女の子が口にするんじゃない」

「でも自分から『あぶろおち』をかけないと師匠は一生構ってくれないって撫子なぐれめさんが……あつー！」

慌てて口を塞ぐ巴。が、既に鉄之助は額に青筋を立て、豆だらけの拳を握り締めたところだった。

「やっぱあの女か……」

「え！？ いや、その……」

「ここで待つてろ」

「あー！ ちよー！！」

巴の制止を力強く振り切り、鉄之助が廊下をドタドタと走り去って行った。

日本が鎖国を始めてから数十年。互いに協力し合い、新たな物を

生み続けた異国らとは対称的に、日本は何処とも協力せず、一つの物だけをただ進化させ続けてた。

そんな閉ざされた国を手に入れようと異国は何度も攻め込んだが、それは叶わなかった。装甲を纏った馬に跨り、強固な金属を鎧に加工して戦う日本人に、異国は為す術も無かったのだ。

日本が進化させていた技術は『加工』。金属を加工し、性能の高い銃や刀を日本は次々生み出していたのだ。

そんな日本で刀鍛冶の代名詞とされるのが、江戸の中心に店を構える『首塚鍛冶屋』。侍の通りが多い町であることや『首塚』という不吉な名前が幸いしてか、そこで売られる刀は数多くの武士に売れた。

そんな鍛冶屋と、通りを挟んで反対側。埃が舞う通りの端に、その家は建っていた。

他の家と変わらない和式の木造建築だが、そこに住んでいる者の生活は決して和式などではない。異国の者と同じような生活を送る、江戸の中ではあまりにも異質な存在だった。

その住民の名は神近撫子。かみちかなでしこ夜の江戸では『胡蝶』こちょうの名で知られる花魁だ。

「撫子え！！」

鉄之助が入口の門を蹴り飛ばし、玄関に草鞋も置かずに土足のままずかずかと踏み入ると、そこには異国が広がっていた。

ちゃぶ台よりも足が高い台や、座布団を敷いた平らな板に四本の長い足が生えた木組みの物体。また、壁に掛けられていた円盤には十二支が円を描いて書かれており、中心から伸びる三本の針がその上を回っていた。

「……………」

鉄之助は、目の前に広がる異質な光景には目もくれず、横にある引き戸に付いていた突起を回して勢い良く引いた。

「……………やっぱり居やがったか……………撫子」

「当たり前でしょう？ まあ、今から寝るつもりだったけど。あと、

鞋脱いでくれる？ マナー違反よ」

戸の奥にあったのは、畳が敷かれた四畳半の狭い部屋。その中心にある、青い蝶の刺繍が施された布団の上に、起伏に富い体の線に沿った窮屈そうな寝間着を着た、若い女性が胡坐を組んで座っていた。

「てめえ……また巴に変な知識植え付けやがっただろ？」

撫子の言葉を無視し、鉄之助は今にも掴み掛からんばかりの勢いで、隈の出来た不健康そうな顔に詰め寄った。

「巴ちゃん？ まあ、私の仕事に興味持ってくれたからさ」

「そういう時は誤魔化すように言っていたはずだが？」

「いいじゃない。もう十二歳でしょ？ だったらセックスくらい経験しても別に問題は……」

「大有りだ！！」

鉄之助は異国の言葉を知らない。だから先程巴が言っていた『あぶろおち』も、たった今撫子が言った『せつくす』の意味も解らない。が、撫子の職業と先程の巴の台詞から、鉄之助は撫子の言葉を漠然と理解していた。

「あの馬鹿正直なあいつならどうなるか想像出来んだろ！ 街中の子供がお前の毒牙にかけられちまうじゃねえか！」

「いいじゃない。皆で協力してこの島国を卑猥な色に染めましょう」

「そんな国には住みたかねえ！！」

鉄之助が睨みを効かせながら怒鳴り付けると、撫子は繊細な黒髪を弄りながら投げやりな口調で答えた。

「うるさいわねえ……分かったわよ。気を付けるからもう寝かせてよ」

「その台詞も聞き飽きた」

「なら諦めなさいな。私もう寝るから出てってね。ちゃんとドアも閉めるのよ」

そう言って、撫子が芋虫のように布団の中に潜り込む。一度睡眠

の姿勢に入った撫子には、何を言っても無駄である。

「……ちっ」

深く深く溜め息を吐くと、鉄之助は頭を掻きながら部屋から出て行った。

実際、撫子が持つ異国の文化は町民の興味の的となっている。巴のヘッドホンも撫子が持っていた異国の品物であり、彼女が子供達に異国の食べ物や玩具を渡して、彼等を楽しませている事も事実だ。撫子はこの閉鎖された国日本で異国の文化を伝える貴重な存在。

だからこそ、鉄之助も彼女を強く責める事はできなかった。

『頓珍漢』という言葉がある。とある事柄が見当外れである事を指して使われている言葉だが、この言葉は元々鍛冶屋で鉄を打つ際に、未熟な弟子が鎚を入れるため、音がずれて響く事から来ている。熟練の鍛冶屋が鉄を打つ事によって、初めて『トンテンカン』と美しい音が響くのだ。

その点においては、巴は未だ未熟な刀鍛冶と言える。根拠は、先程から鉄之助の耳に流れ込んでいる『トンチンカン』という間の抜けた音だ。

「戻ったぞ」

鍛冶場の扉を開けると、巴が真剣な表情で鉄を打っていた。汗が垂れぬように額に汚れた布を巻き、長い髪も土色の紐で後ろに纏めている。

「……………」

鉄之助は閉めた戸の前に腕を組んで立ち、無言で弟子の仕事を見守っていた。

いや、見守っていたというよりは、ただ声をかけなかったと言った方が正しいだろう。欠伸をしたり耳の穴を掻いたり、鉄之助の態度は明らかに『見守る』という言葉からは掛け離れていた。

鉄之助が巴に声をかけない理由。それは、巴の両耳を挟むように

付けられている円盤状の物体にある。

これは、撫子が巴に渡した異国の機械で名を『ヘッドホン』と言う。藍一色に染められているが、右側の円盤には赤と緑の二つの突起があり、緑の方の突起は機械の中に減り込んでいた。この突起を『スイッチ』というらしいが、これを押すと二つの円盤かた異国の音楽が流れるという代物だ。

巴はしばらくの間、刀の形になっている鉄を均等に叩き、右手に持った金鎚を置いた。先程服にしまった物ではなく、鍛冶場に初めから置いてあった金鎚だ。

「ふう……」

ヘッドホンの位置を軽く直してから、鉄之助に気付く様子も無く傍に置いてある桶から泥を掬い、慎重な手つきでそれを刀に塗った。焼き入れする際に、刀に熱が均等に素早く行き渡るために刀を乾燥させる、『泥塗り』という作業である。

「つはあ……」

一息吐くと、巴は泥の付いた手を額の布で拭ってから、ヘッドホンにめり込んだ緑の突起を押した。

瞬間、飛び出る突起。巴はヘッドホンを首にかけ、汚れた布で汗に濡れた顔を拭いた。

「あゝやつぱり大変だな……。……って、師匠!!」

「気付くのが遅え」

肩衣の中から抜いた、鞘を被った脇差しで額を小突く。「あてっ」という可愛らしい声がした。

「申し訳ありませんでした。音楽聞いてました」

「熱中し過ぎだ。熱で機巧からくりがおかしくなっちゃまうぞ」

「そしたら撫子さんに直してもらいますし。それにこれ、歌舞伎や短歌なんかよりよっぽど軽快で明るいんですよ？」

額を摩りながら巴が涙目で訴える。鉄之助は深く溜め息を吐いた。「たく……とりあえず刀が乾燥するまで飯食うぞ」

「へー!? もうそんな時間なんですか!?!」

「俺が腹減ったから食うんだ。時間なんざ知るか」

鉄之助はそう言つて、巴に背中を向けた。

「あ、待って下さい師匠!!」

慌てて巴がその背中を追い掛けた。

「瓦版!!」

叫び声と共に、何枚かに重なった紙が、店番をしていた鉄之助の顔面に叩き付けられた。

「……あの野郎」

嵐のように走り去つて行つたのは自称『江戸の疾風』の瓦版屋だ。まだ幼い少年だが、足の速さならば江戸で右に出る者無しと謳われる程で、その情報を伝える速さは町民に高く評価されている。ただし、瓦版を配る時も一切足を止めないので、安全に瓦版を受け取るには相当の瞬発力が必要だが。

『首塚鍛冶屋』は江戸では評判の鍛冶屋だが、毎日のように繁盛しているわけではない。普段店に来るのは国からの注文が、もしくは巴に会いに来る近所の子供達程度だ。

つまり、店番をしていると言つたがそれは刀が盗まれないように用心する程度で、別に客の呼び込みなどはしない。だから、瓦版は鉄之助の絶好の暇潰しとなった。

『相次ぐ連続女児誘拐事件。犯人は複数人か』

「……………」

つまらなさそうに耳の穴を搔くも、さりげなく鍛冶場の方向を見る鉄之助。鍛冶場は外とも繋がっているのだが、流石に誘拐ともなれば争う音が聞こえてくるだろう。巴は今頃焼き入れの作業中だろうと、鉄之助は再び瓦版に目を落とす。

『また、犯人達は女児を音も無く誘拐するといわれ……………』

「……………」

鉄之助が首を傾げる。思えば、巴が焼き入れの工程に入って相当経つというのに、熱した刀を水で一氣に冷却する時の爽快な音が全く聞こえない。

「いや、ありえねえな」

一瞬よぎった考えを否定しつつも、立ち上がって鍛冶場への戸を開ける。

「おい、巴。いつまで焼き入れして」

瞬間、鉄之助の表情が凍り付いた。

薄暗い部屋で、少女が目覚ます。土色の壁と天井が、未だぼやけている少女の視界に映った。

「はれ……？」

首筋のヘッドホンの感触を確認し立ち上がろうとするが、少女はすぐにバランスを崩す。

「うおっと」

見ると、少女の右手首は鉄の鎖で地面に繋がれていた。

「あら。器用な職人もいるんですね」

明らかに監禁されているこの状況にも、気楽に対応するその姿は、紛れもなく巴そのものであった。

「ところで、何故私がこんな所に？」

記憶を掘り返し、そして思い出す。焼き入れの工程に入り刀を熱している時に、面妖な面立ちをした男が二人襲い掛かって来た事。鉄之助から貰っていた脇差しで応戦しようとしたが、嫌な臭いのする紙を鼻に押し付けられ、そこで意識が途絶えた事。

「どうしましょう。早く刀を冷やさないと師匠に怒られる」

空いている左手でボロきれを探るが、脇差しは見付からない。が、

普段から身につけている金槌は無事だった。

「な〜ら〜ば！」

目をキラリと輝かせながら、巴は金槌を縦に割った。

景気の良い音をたて、真つ二つに開く金槌。その中からは、鉄で編まれた繭のような物が出て来た。

「これをこうして……」

繭から一本の黒い紐が伸びたと思えば、それはヘッドホンの右耳側にカチリと刺さる。

「これでよしと」

ヘッドホンを耳に装着して、巴は赤い突起を押した。

『ザー……ザー……ザー……』

巴の耳を雑音が通り抜けていく。

「あれ？ 困ったときはこうしろって師匠に言われてたのに……」

今度は左手に持った鉄の繭に向かって「あー」や「うー」等呟く。
が、返事は返って来ない。

「し〜し〜う〜」

『ザザッ！ ……何だ？』

「うわっ！ 師匠の声だ！」

『当たり前えだ。てかてめえ今何処にいやがる』

「全く分かりません。薄暗くて狭い部屋です」

『状態は？』

「右手と床が鉄の鎖で結ばれています」

ヘッドホンの向こうから聞こえる鉄之助の声に、巴が淡々と答えていく。やり取りが、数分程続いた。

この、遠距離でも会話が可能になる装置は、異国では『とらんしばあ』と呼ばれている物らしい。巴が持っている『まいく』という鉄の繭に声を送れば、それが鉄之助に伝わり、会話することができる。撫子に貰ったヘッドホンの機能の一つだ。

『……つまりお前は変な顔と髪の変人共に連れ去られたと？』

「そついうことですね」

ヘッドホンの向こうから深い溜め息が聞こえた。

『そいつらは、最近よくガキを誘拐してる奴らだな』

「そんな事があったんですか？」

『お前はいつも鍛冶場に引きこもってるから知らねえだろうが、今日の瓦版でも話題になっていやがった。集団で音も立てずにガキを誘拐するらしい』

「ああ、確かに声をあげる前に変な紙を当てられて、気を失いましたよ。でも二人しかいませんでしたよ？」

『……………』

巴の疑問を無視し数秒間鉄之助が沈黙するが、巴は不安に思わない。鉄之助はおそらく自分を助ける手段を考えているのだから、安心だとすら思っていた。

『…………多分他に仲間がいる。てか、そのままだとお前はどっかに売られるかもな』

「どうしてですか？」

『金になるからな』

淡泊なその言葉で、巴の声が震え始める。

「…………売られて…………どうなるんですか？」

『幼女好きの変態に飼われる』

巴が、息を飲んだ。

「どうしましょう。私、もう五日もお風呂に入ってません。このまま裸を見られたら、一生の恥です」

『…………そんな心配ができるなら一先ずは安心だな。あとそれは入らなすぎだ。帰ったらすぐ入れ』

自分は、江戸にいる異国に通じた人物全員を尋問すると、そう言うて鉄之助の通信が切れた。

「…………はあ…………暇だな…………」

呟いた瞬間、その声に応えるかのように、巴の視線の先にある壁が横に回転し、奥から一人の人間が入って来た。

「おや、貴女は…………」

「瓦版屋あ！！」

「うわっ！！」

全ての瓦版を配り終え、家へと戻らんとしていた少年を鉄之助が呼び止めた。いや、怒鳴り止めたと言った方が正しいかもしれない。「な、何ですか、いきなり！？」

「てめえ、江戸中に瓦版ばらまいてんなら、異国と関係してる人間の居場所くらい分かるだろ？」

「え、ええ。一応分かりますけども」

「連れてけ」

「はいっ！？」

「だから全員の所に連れてけっつってんだ！！」

瓦版屋の胸倉を掴み上げる。突然の出来事にまだ若い瓦版屋は顔を引き攣らせ、肩を震わせた。

「な、何でそんな事を！？」

「巴がさらわれた」

「っ！！ か、巴さんが！！」

「ああ。ちよつとした方法で連絡は取れたが居場所だけが分からねえ。異人に連れ去られたことだけは分かっただ」

「だ、だから異人と通じている人に？」

「ああ。お前の足じゃねえと間に合わねえんだ！」

その言葉を聞いた瞬間、瓦版屋が目を見開いた。

「僕の……足ですか？」

「ああ。頼む」

鉄之助が頭を下げる。自分の誇りを頼られた少年は、薄い笑みを浮かべた。

「……置いてかれないで下さいよ」

瓦版屋が走り出す。それに並ぶように、鉄之助も走り出した。

「どうもです。撫子さん」

「あら、意外と冷静なのね」

「そりやまあ、顔馴染みですし。それにすぐ師匠が助けに来ますから」

淡泊な巴の返答に、撫子がつまらなさに眉を寄せた。青い蝶が縫われた着物を着ているが、その不健康な顔に化粧は施されていない。

「無理でしょ。あの男がここに気付くわけがないわ」

「犯人が異人と通じている事はもう伝えました。後はここに来るのを待つだけです」

自慢げな巴の言葉に撫子が首を傾げる。

「伝える？ どうやって？ はったりももう少し上手くやりなさいよ」

「何を言ってるんですか？ この連絡装置をくれたのは撫子さんじゃないですか」

左手でヘッドホンを持ち上げて撫子に見せる。撫子は巴に近付かずに、それを怪訝そうに見つめた。

「……何よその赤いボタン？」

「ぼたん？ ああ、この赤い突起ですね。これを押せば師匠と連絡が取れるって師匠が言っていました。これ撫子さんがくれた物ですよね」

「ええ。貴女にプレゼントするように鉄之助に言ったわ。……でも私はそんな機能付けてない」

キョトンとする巴を気にせず、撫子は片手で頭を抱えた。

「まさかあいつが……？」

その疑念を振り払うかのように頭を振る。が、顔からは焦りが消えていなかった。

「……？ 師匠が……あれを？」

首を傾げながら巴が呟く。撫子は答えずに、目の前の無力な少女を睨み付けた。

「まあ、あいつは多分私を疑ってないからここに来るまで時間がかかるでしょ。その間に、取引しましょ」

巴の体が届かない程度に距離を保ちながら、ゆっくりと近付いて行く撫子。

「巴ちゃん？ 貴女はこのままおとなしくしていれば、夢みたいな世界に行けるのよ」

撫子が、優しい笑みを巴に向ける。

「夢みたいな世界……ですか？」

「そうよ。毎日綺麗な服を着て綺麗なお化粧をするの。巴ちゃんだったらお客さんも大喜びだわ」

「化粧……？」

巴が目を見開き、思い出す。ある夜に星を見に外に出た時の事。偶然家から出るところだった撫子と鉢合わせ、その時に見た、白く美しい化粧を。

「私が……化粧ですか？」

「ええそうよ。美人さんになれるのよ？ いい話だと思わない？」

巴が俯き、肩を震わせる。その姿は、迷っているかのように見えた。

「……………」

「さあ、どっちを選ぶの？」

追い打ちをかけるように迫る撫子。同時に、巴が顔を上げた。

「私は」

「くそっ！　ここも外れかよー！」

「ここも違うとなりますと残るのは……」

強盗に入られたかのようにめちゃくちゃに粗探しされた家と、声をあげて泣いている家主を背景に、二人は立っていた。

「どこになる？」

「非常に申し上げにくいのですが……」

鉄之助の顔色を伺うように慎重に瓦版屋が告げた。

「神近さんのお宅になります」

「っー！」

鉄之助が、悔しげに唇を噛んだ。

「……行きますか？」

「……当然だ」

その言葉を合図に、二人が再び走り出した。

「私は　こつちを選びます」

巴が左手で地面の土を掴み、それを思いきり顔に押し付けた。

「流れる汗は苦勞の証。こびりつく土は努力の証。この二つがあったからこそ私は刀鍛冶を続けられたんですよ」

そして、巴は可愛らしく満面の笑みを浮かべた。

「私にとってこれ以上の化粧はありません。私は鍛冶屋を続けます」

「……そう、なら仕方ないわね」

撫子が軽く両手を叩く。すると奥から、髪や顔が日本人とは掛け離れている人間が五人現れた。

「貴女には少し教育が必要みたい」

振り返り、意味不明の言葉を早口で告げる撫子。奥にいる異人には言葉が通じたようで、五人は笑顔で頷いて、腰から縄や鞭を抜い

た。

「それじゃ、こっちに来るって貴女が言うまで教育をさせてもらうわ」

下品に笑いながら、じりじりと詰め寄る男達。巴もそれに合わせ、ゆつくりと後ろに下がる。

「安心して。その人達は小さな女の子が大好きなの。優しく扱ってくれるから、すぐ虜になるわ」

鎖が限界まで伸びる。焦りを見せる巴の表情とは対称的に、男達の笑みはさらに下品さを増していった。

「……無駄ですよ」

「え？」

顔に疑問の色を浮かべる撫子を、巴が睨み付けた。

「どんな痛みを味わっても、どんな辱めに会おうと、私は屈しません」

ミシリ

天井が鳴る。しかし、撫子の注意は巴に向けられていた。五人の男は、少女の迫力に気圧されたように足を止める。

「だって……師匠は必ず……」

天井が鳴る。今度は振動と共に。

「必ず、私を助けてくれますから」

天井が轟音を鳴らす。埃と振動と共に。そして、一つの影と共に。……巴……。怪我はねえか？」

「……はい、師匠」

力強く答える巴に満足したように落ちて来た鉄之助は笑い、撫子達に向き直った。

「うちの弟子が世話になったみてえだな……」

たとえ顔馴染みであっても関係無いとでも言うように、鉄之助が腰に差した脇差しを抜いた。

「かかってきやがれ、白豚共！」

異人達の雄叫びが地下に響く。しかしその勢い虚しく、次々と脇

差しの峰で頭蓋を叩き割られていった。

「っ！」

撫子が息を飲む。同時に、巴の手首の鎖を斬った。

「私を……どうするつもり？」

鉄之助は何も話さない。ただ、瞬時に撫子の間合いに入り、その柄を腹部にめり込ませていた。

「うっ！」

呻き声をあげながら倒れる撫子。不思議と巴の心には、同情の気持ちは湧いていなかった。

「首塚さん！ 番所の人を呼んで来ました！」

「ああ。ありがとよ」

真上から聞こえた声の主は瓦版屋だろうか。巴がそんな事を気にしている内に、大きな手が背中と太腿の裏側に回され、持ち上げられる。

「あらよつとー！」

宙を浮く感覚がして、鉄之助は着地した。そこは、撫子が普段眠る畳が敷かれた部屋だった。

「……平気か？」

「……はい」

鉄之助の腕の中で笑う巴。その頬に、涙が伝ったように見えた。

「撫子は牢獄に入れられたらしい」

「まあ、そうですね。誘拐ですし」

箸で魚を器用に分解しながら、二人は話す。

「ところで師匠」

「あ？」

「この機巧に付いていた通信機能ですが、撫子さんが付けたものではないらしいんです」

「ああ。俺が改造した」

「……………」

「……どうした？」

「一体どこでそんな技術を？」

「昔会った異人に習った。ピエール山田とか言う胡散臭い奴だったが、機巧の腕だけは確かだったな」

「ピエール山田ですか？」

「ピエール山田だ」

数秒の沈黙が過ぎた途端、巴が声をあげて笑い出した。つられるように、鉄之助も。

二人の笑い声は、食事が済むまで続いていた。

ここは江戸一番の刀鍛冶がいると言われる『首塚鍛冶屋』。
今日もここの鍛冶場では、頓珍漢な音が鳴る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2150m/>

ロリコン、脇差し、ヘッドホン

2010年10月8日14時31分発行